

文学と倫理：  
「経営者」ロビンソンを倫理的に読むと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学研究科表現文化学教室 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 映子 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	<a href="https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006482">https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2006482</a>

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	文学と倫理：「経営者」ロビンソンを倫理的に読むと
<b>Author</b>	荒木, 映子
<b>Citation</b>	表現文化. 2 巻, p.3-19.
<b>Issue Date</b>	2007-03
<b>ISSN</b>	
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学研究科表現文化学教室
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

# 文学と倫理

## —「経営者」ロビンソンを倫理的に読むと—

荒木 映子

道徳的な本とか非道徳的な本というのはない。  
本はうまく書けているか下手かのどちらかだ。

オスカー・ワイルド

「企業倫理」について考えたことをきっかけとして（後のエッセイ「企業の品格」参照のこと）、倫理という観点から、デフォー（Daniel Defoe）の『ロビンソン・クルーソー』*Robinson Crusoe*（1719）と、クッツェ（J. M. Coetzee）『敵あるいはフォー』*Foe*（1986）を比較してみたいと思った。といっても、文学は道徳的であるべきかどうかというような問題設定（そういうことにはあまり興味がない）をするのではなく、それぞれの作家、あるいは物語における倫理のあり方とそれへの問いかけを問題にする。デフォーの場合には、孤島での生活を生き延びたクルーソーの物語が、今日のポストコロニアル批評の立場からは、征服と篡奪の物語として読めることを、また、クッツェは、eが欠落した *Cruso* を登場させ、次々とクルーソー物語をつきくずすことによって、何を言いたかったかを問題にしようと思う。作家自身が意識しなくとも、物語が倫理的問題を惹起したり、物語するという行為や読むという行為がいやおうもなく倫理とかかわってきたりするからである。<sup>1</sup>

### I

デフォーの小説『ロビンソン・クルーソー』は、海洋冒険ものの原型として、多数の変形譚（ロビンソナード *Robinsonade*）を生み出したが、

クツツェの『敵あるいはフォー』もその長い系譜に連なる。冒険物語につきまとう帝国主義的、人種差別的、男性中心主義的傾向を『ロビンソン・クルーソー』が幾分免れているように見えるとすれば、それは、プロテスタント的な美德を涵養する、子供向きリアリズム文学、あるいは宗教的「自己告白」(spiritual autobiography)の書としての面を持つからであろう。つまり、原題の *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* の「冒険」部分を「人生」が補完していると言える。

しかし、経済学者はこの小説を、資本主義経済以前の経済活動を示す一例として解釈してきた。カール・マルクスとマックス・ヴェーバーがそれぞれにロビンソン・クルーソーの経済的側面を分析したことに始まり、社会科学では、17・8世紀の中産階級を特徴づけている合理的で現実的な行動様式、経済人(ホモ・エコノミクス)という人間類型を表すものとしてロビンソンが取り上げられてきたし、<sup>2</sup> さらに経済問題の論者としてのデフォーも注目されている。デフォーは、『ロビンソン・クルーソー』(これに続く続編も二つあるがほとんど読まれていない)、『モル・フランダーズ』 *Moll Flanders*、『ロクサーナ』 *Roxana* のような写実的な冒険もの、あるいは時局的な『ペスト年代記』 *A Journal of the Plague Year* によってのみ、英文学では有名であるが、実際には多数の経済論を発表した経済論者としての面も見逃せないのである。デフォーが最初に出版した書物は、『企画論』 *An Essay on Projects* (1697) という17世紀末のイギリスの社会、経済への抜本的な改革を提言するものであったし、18世紀の初めには、『評論誌』 *Review of the State of the British Nation* と呼ばれる雑誌を発行して、活発に植民地政策や貿易、戦争、政治等々について意見を発表していた。<sup>3</sup> 『イギリス経済の構図』 *A Plan of the English Commerce* (1728) は、邦訳の解説によると、デフォーが断片的に述べていた経済についての諸問題がよくまとまって整理された書物であるという。<sup>4</sup> ここで「経済」と訳されている「コマース」は、後に出てくる「トレード」と並んで、「取引」と「製造業」の両方の意味を含む用語であると

デフォーはこの書物の冒頭で定義しており、今日の「商業」という訳語よりは、むしろ「商工業」とでも訳すべき経済用語であった。同じくこの解説では、経済論者としてのデフォーを評価するおそらく最初の論考として、John Robert Moore, *Daniel Defoe and Modern Economic Theory* (1934) が紹介されている。これは、Indiana University Studies というシリーズの一冊で、30 ページに満たない小冊子ではある。市大が所蔵していたので、読んでみると、デフォーはアダム・スミスに 70 年以上も先立って「国富論」を唱え、当時支配的であった古い重商主義の考え方を疑い、「トレード」の重要性を訴えた、「経済学における偉大なるパイオニアの一人」であると評価されている。また、比較的最近では、Stephen Hymer, “Robinson Crusoe and the Secret of Primitive Accumulation” という論文が、Edward J. Nell, *Growth, Profits, and Property* (Cambridge UP, 1980) という論文集に入っているのを偶然見つけた。<sup>5</sup> この小論では、経済学の専門家ではないので、ハイマー (Hymer) の論文を手がかりにして、経済人ロビンソンを倫理的に考察してみたい。

ハイマーによれば、経済学者は『ロビンソン・クルーソー』を「インターナショナル・トレード」を分析する際の出発点としているということだ。経済学者は、ロビンソン像を、理性によって自然を克服した、勤勉で利口な儉約家としてのみ描き、この物語が征服と圧制と略奪と暴力の物語でもあることを無視しているという。それは、「インターナショナル・トレード」が持つ二面性に相当するという。つまり、経済学者が考えたがる、平等の原則に基づいて相互の利益のために取引をする牧歌的なそれと、優越者と従属者、植民者と被植民者、中心地と僻地との間の不平等で暴力的なそれとの二面である。マルクスが『資本論』で述べているように、「資本主義的蓄積」(capitalist accumulation) に先行する「本源的蓄積」(primitive accumulation) にすでに、富の所有者と労働力の販売者の分離が見られ、それは人類に課された原罪ではあっても、牧歌ではありえなかったという。(p29)

ロビンソンが無人島で生存し通しただけでなく、本国に帰って経済的

に成功までした要因として、創意工夫の才、勤勉、儉約、労働を善とする考え方 (work ethic) といった中産階級的価値観に加え、難破船から引き揚げた物資や道具、中でも武器や弾薬を計画的に利用したことが、経済人、特に経営者もしくは企業家としてのロビンソンを考える上で重要である。ロビンソンはこれらの生産手段をうまく利用して自然ばかりか他人までも支配下におさめ、後にトレードを始めた時には、銃と弾薬の蓄えが十分にあったことがクルーソーを決定的に有利な立場に立たせたと、ハイマーは指摘している (p32)。

まず、これを裏付ける箇所を二箇所引用してみよう。徐々に島の生活に慣れて、自分の境遇のバランスシートの利益の方がはるかに多いと実感できるようになった頃、船の物資を回収できた幸運を神にあらためて感謝する場面がある。

もう一つ反省したことはとても私の役に立ったし、私と同じような窮地に陥った人には間違いなく役に立つであろう。それは、現在の私の状況を、最初にそうなるかもしれないと思った状況、つまり、神の摂理が見事に働いて、岸の近くに難破船が打ち上げられなかったとしたら、きっとそうになっていたに違いない状況と比べてみることだった。私が船に近寄れただけでなく、私の救いと慰めになるよう、船から取ってきたものを陸揚げさせてくれたのは神のおかげであった。そうでなければ、仕事をする道具も、身を守る武器も、食べ物を手に入れるための弾薬も弾も欠くことになっただろう。

Another reflection was of great use to me, and doubtless would be so to any one that should fall into such distress as mine was; and this was, to compare my present condition with what I at first expected it should be; nay, with what it would certainly have been, if the good Providence of God had not wonderfully ordered the

ship to be cast up nearer to the shore, where I not only could come at her, but could bring what I got out of her to the shore, for my relief and comfort; without which, I had wanted for tools to work, weapons for defence, or gun-powder and shot for getting my food.  
(p104)

現在の幸運な状態とそうであったかもしれない悲惨な状態とを比較することで、いっそう神への感謝の念を強くしている。たとえ死なずに生きられたとしても、もし船が近くに押し流されてこなかったとしたら、道具を持たない「単なる野蛮人」「a meer savage」(p104) になりはてたかもしれない、と述べている。道具を使えることが「文明人」に欠かせない条件ということである。

武器のおかげでフライデイを臣下とし、数年後さらに、命を救ってやったその父親とスペイン人とを従えた時、ロビンソンは新しくできたコミュニティーと自らの王者の地位に愉悅する。

私の島には人が増え、臣民が大勢できたという心境だった。自分が王らしくなったとしばしば悦にいつてみたものだ。第一に、全領土が私自身の財産であり、その支配権は間違いなく私にあった。第二に、私の人民は完全に私の支配化にあった。私は絶対君主で立法者だ。彼らはみな私に命を預けていて、そういう機会があれば、喜んで私のために命を投げ出す覚悟があった。三人しか臣民はいないのに、それぞれが異なった宗教を信じているというのは驚くべきことだ。私の召使のフライデイはプロテスタントで、彼の父親は異教徒で食人種だ。スペイン人はローマン・カトリックだ。しかし、ついでに言うと、私の領土では彼らの良心に任せて自由にさせていたのだ。

My island was now peopled, and I thought my self very rich in subjects; and it was a merry reflection which I frequently made, how like a king I look'd. First of all, the whole country was my own meer property; so that I had an undoubted right of dominion. Secondly, my people were perfectly subjected: I was absolute lord and law-giver; they all ow'd their lives to me, and were ready to lay down their lives, *if there had been occasion of it*, for me. It was remarkable too, we had but three subjects, and they were of three different religions. My man *Friday* was a Protestant, his father was a pagan and a *cannibal*, and the *Spaniard* was a Papist: However, I allow'd liberty of conscience throughout my dominions: But this is by the way. (p190)

孤独な犠牲者から植民地の君主へのロビンソンの変貌は、物語の変換点であり、庇護と忠誠の関係に基づく植民地主義が始まった箇所と位置づけられる。しかし、ロビンソンは、はしゃぎ過ぎをさとられないように、ことさら冗談めかして「王」や「絶対君主」や「臣民」といった呼び方をしている。この箇所を経済学的視点から読むとどうなるか。ハイマーは、この箇所に、「本源的蓄積の時期は終わり、ロビンソンは今や資産を持つことになったが、それは以前の彼の労働から手に入れたのではなく、幸いにも武器を保有していたからなのだ。」(p38)とコメントを加えている。これ以後、持てる者と持たざる者との分断はさらに大きくなる。ハイマーは以下のように指摘する。ロビンソンは働くのをやめてしまっても富を着実に増やし続けるが、フライデーは怠惰でもないのに働いても働いても結局身ひとつを持つだけである。帝国が拡大するとそのかかえる問題は複雑化するが、ロビンソンは巧みに威嚇や宗教や法律や権威を使い分けて、島の独裁者の立場を保持し通す。さながら「多国籍企業の縮図」の外観を呈しているも、島では市場経済が介入してこない分、資本家とそうでない人間との経済的な関係が直接的に目に見えやすく提示されるのだ、と。

(pp38-9)

この二つの引用が明らかにするのは、企業家、経営者としてのロビンソンの資質である。若い頃には、ブラジルでプランテーションの経営をし、黒人奴隷の売買に携わりかけたという前歴があった。孤島では、帳簿をつけて資本を合理的に管理運用するだけでなく、武器や契約によって他の人間を操っていく。フライデイをいつも変わらぬ忠実な家臣として (“never man had a more faithful, loving servant than Friday was to me”, p165)。かくて、自ら額に汗して働くということをとくにやめてしまっても、ロビンソンは、他人に労働を提供させることによって、島の経営を円滑に進め、島での生活 28 年 2 ヶ月 19 日にして無事イギリスへ生還することになる。その後まだ後日談があって、かつてブラジルで共同経営をしていた農園に戻ってみると、農園が改良されて思いがけない収益をあげていることがわかる。こうして、最初に故郷を出た時の所持金 40 ポンドは、最終的に正貨 5000 ポンド以上、ブラジルでの不動産による年収 1000 ポンド以上にふくらんだのである。

ロビンソンのシマは、いわば、イエ、ムラ、国家のような自然発生的な組織、共同体に近く、学校、スポーツクラブ、労働組合、政党、会社のような作為の組織ではない。<sup>6</sup> 選択の余地なく、偶然の作用によって、島での生活を余儀なくされた者の集まりである。にもかかわらず、日本的な家族主義的公司経営のごとき滅私奉公がロビンソンには捧げられている。この忠誠心はどこから来ているのだろうか。クルーソーが命の恩人であることへの恩義はあるにしても、父権的な保護を与える代わりに、絶対の服従を巧みにロビンソンが仕向けてきたからである。フライデイについて、「子が父に寄せるように、彼の愛情はしっかりと私につなぎとめられていた。私の命を救うためなら、自分の命を喜んで投げ出すほどであった、と言ってよい。」(pp165) と述べている。その理由をロビンソンは、神の摂理の不公平ゆえに、同じように能力、理性、情愛、親切心や恩義の念、義憤、感謝、誠実さ、忠誠といった魂の力を与えられていながら、神がこれらの力を活用する機会を与えなかった者がいるというふうを考えるのである。

つまり、「野蛮人」は、神によって力の活用と救いの機会を隠されているのであって、自分がそれを奪っているのだとは夢にも考えはしない。

こういう問題を考えているうちに、私は神の摂理の厳粛さを侵し始め、ある者からは光を隠し、ある者には光を与えながら、同じ義務を期待するという、気まぐれな配剤の仕方を糾弾したい気になっていった。しかし、口をつぐんで、そういう考えを抑えつけ、このように結論した。(第一) これらの人がどのような光と掟によって裁かれているのか我々にはわからないということである。神は、必然的に、神自身の性質により、無限に神聖で正しい方でおられるので、これらの野蛮人がすべて神の恩寵を受けないよう宣告されているとしたら、それは、聖書が彼らの掟だとしている光に対して、罪をおかしているからだということである。その根拠は我々には示されていないのだけれど、彼らの良心が正しいと認めるような法則によってもそうなのである。そして、(第二) 我々が依然として陶工の手の中にある粘土である以上、どんな器も陶工に向かって「なぜあなたはこんな風に私をお作りになったのですか」とは聞けない、ということである。

From hence I sometimes was led by far to invade the sovereignty of Providence, and as it were arraign the justice of so arbitrary a disposition of things, that should hide that light from some, and reveal it to others, and yet expect a like duty from both: But I shut it up, and check'd my thoughts with this conclusion, (1<sup>st</sup>) that we did not know by what light and law these should be condemn'd; but that as God was necessarily, and by the nature of his being, infinitely holy and just, so it could not be, but that if these creatures were all sentenc'd to absence from himself, it was on account of sinning against that light which, as the

Scripture says, was a law to themselves, and by such rules as their consciences would acknowledge to be just, tho' the foundation was not discover'd to us: And (2<sup>nd</sup>) that still as we are all the clay in the hand of the potter, no vessel could say to him, Why hast thou form'd me thus? (pp165-6)

フライデイを従属させることを正当化するために、彼の側から自発的な服従心（その能力は神から隠されていないので）を示しているのだと思ひ込み、救いの光を隠された劣等人種であることは、神の配剤であるかのように考えたがる。自分に忠実な者に対しては、温情をたれるが、歯向かう者は容赦なく切り捨てる。切り捨てられた下層の白人や非白人はこの小説の中で死屍累々と横たわっている。自分の貪欲さの罪も、神へ祈りを捧げることで、解消されてしまう。ハイマーは、「彼は貪欲さを、他の人間に対してではなく神に対する罪だと考えている」(p40)と指摘している。搾取的な島の経営が神を巻き込んで正当化されているのだ。自己利益の追求と搾取を温情主義と神への祈りにすりかえてしまうこのレトリックが倫理の観点から問題にされるべきであろう。<sup>7</sup>

## II

『ロビンソン・クルーソー』の改作群を徹底的に調べ上げて、その精神史にまで踏み込もうとしたマーティン・グリーン (Martin Green) の研究は、「冒険もの (adventure) は、1600 年頃に始まり今なお終わっていない白人ヨーロッパ諸国の膨張的帝国主義動向の文学的反映」であるという歴史的な一般論から説き起こしている。そして冒険ものの常として、読者の共感を得るために、帝国主義という自明の悪または傲慢に対抗する徴標（『ロビンソン・クルーソー』の場合には、「プロタスタント的良心、労働の民主主義」）を伴うと述べている。『ロビンソン・クルーソー』において、帝国の観念はスペインやローマ・カトリック教会に帰属させられ、ロビンソ

ンはこれに反対するすべてを代表しているという。<sup>8</sup> とするならば、デフォーの意図は、企業家ロビンソンに当時力をつけてきていた資本主義精神と中産階級的価値を代弁させ、教訓的な英雄物語に仕立て上げることであったと言える。

では、デフォーから 250 年以上も後に書かれたクッツェの『敵あるいはフォー』はどうか。グリーンの訳者である岩尾龍太郎の『ロビンソン・クルーソー変形譚小史』によれば、クッツェの作品は、『ピーター・パン』*Peter Pan* (1904) を皮切りとする第四期の「反ロビンソンあるいは寓意的ロビンソン」に分類できるという。<sup>9</sup> ほとんどあらゆる点で、元の小説の逆をいくと考えてよい。

主人公は、スーザン・バートン (Susan Barton) というイギリスの女性であり、彼女は誘拐されたと称する娘を探してブラジルへ行き、そこからさらにポルトガルへ渡る船の中で叛乱に遭遇し、ロビンソン・クルーソーのいる島に漂着するという設定になっている。そこで目にする島の風景も生活もロビンソンもフライデイもことごとく元の小説を裏切るものである。ようやくイギリスに戻れるようになっても、ロビンソンは到着の三日前に死んでしまう。この第 I 章は、スーザンが読者 (“you”) に対して語りかけているように最初思えるが、後で呼びかけの相手がフォー (Mr. Foe) という作家であるということがわかる。第 I 章全体が引用符に入っている。こんなあらすじのようなものを書くこと自体、およそあらすじにすることに挑戦するようなこの小説にさからうことになるが、とりあえず、大体の構成がわかるように最低限のことを書いておく。

第 II 章ではスーザンがロンドンにいるフォーに書く手紙である。引用符はついたまま、それまでの過去形から現在形に変わる。スーザンはフライデーと一緒にロンドンに住んでいる。この章で明らかになるのは、スーザンが自分の漂流譚を小説にしてくれとフォーに頼んでいること。第 I 章の内容は、小説にしてもらうためにスーザンが書いた回顧録であった。現在進行形で話は進んでいき、スーザンの娘と名のる人物が現れてもスーザンが否認したり (『ロクサーナ』が下敷きになっている)、フライデイをア

フリカに帰そうと港に行くが結局連れて戻ったり、フォーの家が差し押さえにあったり、というような事件が起こっていることが、手紙の記述からわかる。

第Ⅲ章は、引用符が取れて、「私」による語りになる。フォーと「私」スーザンとが出会い、ロビンソンの物語の内容について言い争う。娘を探す女の物語を書こうとするフォーと、ロビンソンの島を中心に書いてほしいというスーザンとの見解の相違。

第Ⅳ章は、第Ⅲ章と同じ書き出しだが、現在形になる。「私」はスーザンではなく、クツツェ自身あるいはクルーソーとも思える人物に変わる。時代はそれまでの18世紀から、現代に変わる。語り手は、難破船に入っていく、登場人物たちの死体を見つける。舌を抜かれたものの言えないフライデーの口から音が流れてくる。第Ⅳ章だけが他の章に比してきわだって短い。

『ロビンソン・クルーソー』の変形譚と呼べるのは第Ⅰ章だけで、小説全体は、『ロビンソン・クルーソー』がいかに書けるか、正しい『ロビンソン・クルーソー』の物語ははたしてあるのか、といった疑問を読者に突きつけ、五里霧中の迷宮にいざなう。18世紀の散文の文体をまねて書かれていたり、デフォーのその他の作品がもろもろ盛り込まれていたり、仕掛けが多すぎてどのように読むかで、たじろぎそうになる。事実、ポストコロニアル風、フェミニスト風、アレゴリー風、さまざまな読解が生まれていて、『フォーあるいは敵』だけで、批評史が紹介されているほどである。<sup>10</sup>ここでは、第Ⅰ章のロビンソンの島に限定して、企業家ロビンソンがいかに書き換えられているかをまず検討してみる。

スーザンが「この奇妙なクルーソー」(“this singular Cruso” p11) と称するクルーソー(この本では、「ロビンソン」ではなく、一貫してこの呼び方が使われる)は、年のころ六十歳くらいと思われるが、日付がわかるように柱に刻み目をつけてもいないので正確なところはわからない。日記をつける習慣もない。紙やインキがないからというよりは、単につける気がなく、要するに怠惰なのである。スーザンが、救出された時のために、

あるいは島で死んでしまった時のために、後世に残す記録が必要ではないかと言っても、自分は何も忘れはしないし、忘れたとすれば、それは覚えるのに値しないからだ、と言って、とりあわない。暗くなったら眠る生活をやめるために、ろうそくランプを作ったらと勧めても、暗闇でもものを見るのに慣れる方が鯨を殺して煮てろうそくにするより簡単だと言う。クルーソーが難破船から取ってきたのは、ナイフだけで（そのおかげで、木を切ったり皮をはいたりして、サンダルや家具や小屋ができています）、近くで沈んだままになっている難破船にもぐって鋸とか斧とかを取ってくるようスーザンが勧めても、その必要性を認めない。

「…我々の頭の上には鋸も斧もなしで作った屋根があるじゃないか。眠って、食べて、生きていられる。道具の必要なんかない。」

「彼はまるで道具は異教徒が発明したものであるようなもの言い方をしました。でも、もし私がかかるとに鋸を結わえて岸に泳ぎ着いたとしたら、彼はそれを受け取って、大喜びで使うことがわかっていました。」

“…We have a roof over our heads, made without saw or axe. We sleep, we eat, we live. We have no need of tools.”

“He spoke as if tools were heathenish inventions. Yet I knew if I had swum ashore with a saw tied to my ankle he would have taken it and used it most happily. (pp32-3)

デフォーのクルーソーが苦勞して船にたどり着き、計画的に生活に必要な物資のあれこれを陸揚げしたことと対照的である。このクルーソーには合理的な経営をして余剰を蓄積にあてるといふような「資本主義精神」は皆無である。野生のレタスと魚と鳥の卵が常食である。デフォーの場合は、土地を囲いこんで畑を耕し、穀物や葡萄やらを育てて「拡大再生産」に励むが、このクルーソーがいそしむ数少ない勤勞は徒勞としか思えない。た

たとえば、丘の斜面に作った段々畑を整地し、石を積み上げて石垣を築いてはいるが、何も植えるものはなく、植え付けは後に種を持ってやって来る者たちの仕事であるという。不合理としか言いようがない。しかも、そもそもこの島から脱出しようという気さえない。

このように経済学者が経営の理想像とする島の生活はことごとく無化され、欠如と無為が支配している。

「おそろしく退屈な中で時は過ぎていきました。段々畑のことや、作ろうともしない船や、つけようともしない日記や、船の残骸から取ってこようともしない道具や、フライデイの舌のことについてのクルーソーへの質問が尽きてしまうと、お天気の話しかなくなってしまいました。クルーソーは、難破の前にしていた商人や農園主の頃の生活は何も話すことがないのでした。

“Time passed with increasing tediousness. When I had exhausted my questions to Crusoe about the terraces, and the boat he would not build, and the journal he would not keep, and the tools he would not save from the wreck, and Friday’s tongue, there was nothing left to talk of save the weather. Crusoe had no stories to tell of the life he had lived as a trader and planter before the shipwreck. (p34)

フライデイという黒人の召使はいるが、舌を抜かれていてもものが言えず、舌を誰にいつ抜かれたのかもはやわかるすがなく、クルーソーは英語を教えようともしない。フライデイがクルーソーにいやいや仕えているのか、忠誠心があるのかもわからないままである。彼が沈黙を強いられ、おまけに去勢されているらしいことは、黒人の側からの、従属させられた者からのクルーソー物語は存在していないということを暗示し、フライデイの復権がクッツェの小説の「反ロビンソン」性の重要な点であると思われる

る。英語を強制していないからといって、植民地主義を免れているわけではない。発話を奪われたフライデイの口は、経営能力を喪失したクルーソー以上に、イギリスの旺盛な経済活動と海外植民地活動、ひと言で言えばイギリス帝国主義に対する、クッツェの倫理的な批判になっているように思われる。

クッツェは、デフォーについてのエッセイで、次のように書いている。

クルーソーは、フライデイと一緒に救助された時も、もちろん「彼の」島を捨てなかった。島には謀反人や無頼の輩を住まわせておいたのだ。彼はイングランドへ戻ったけれども、こうして築き上げた植民地での足場を狡猾にも保持するのである。『ロビンソン・クルーソー』というのは、新世界におけるイギリスの商品経済力の拡大と新しいイギリスの植民地の設立のための臆面もないプロパガンダである。

Crusoe does not, of course, abandon "his" island when, along with Friday, he is rescued. He leaves it peopled with mutineers and castaways; though he returns to England, he cannily retains a foothold in the colony he has thus founded. Robinson Crusoe is unabashed propaganda for the extension of British mercantile power in the New World and the establishment of new British colonies.<sup>11</sup>

「臆面もないプロパガンダ」と明言するのは、クッツェ自身が南アフリカ出身のオランダ系の白人、アフリカーナであるという経歴が関係しているかもしれない。大陸では数々のロビンソン変形譚が現れたにもかかわらず、本国イギリスでは、黙して語らずというところがあって、英文学の「偉大な伝統」からははずれた扱いをされてきたのは、『ロビンソン・クルーソー』が持つ帝国主義・資本主義の要素のゆえであった。<sup>12</sup> イアン・ワット Ian

Watt『小説の勃興』*The Rise of the Novel* (1957)あたりから、その個人主義の主張とリアリズムの技法が、近代小説として評価され始めたと言える。クツツェの場合は、支配層である「イギリス系南アフリカ人」とは異なるが、家庭でも学校でも英語を使い、イギリス人でもアフリカーナでもないという複雑な文化の中で生きてきている。彼は、ナディン・ゴードイマ (Nadine Gordimer) やアンドレ・ブリンク (André Brink) 等の南ア白人作家と異なり、アパルトヘイトを正面から告発するような小説を書いているが、この小説を南アの現状をとらえた政治的なアレゴリーと読むことも可能なのである。植民地主義において他者に対する責任はどうとれるのか、アパルトヘイトを無効化することはできるのかという倫理的な問題意識がクツツェにこの小説を書かせたと言えるのではないか。

デフォー好きのジェイムズ・ジョイスは、ロビンソン・クルーソーを「イギリス帝国のおこなった征服の真の象徴」とであると認めている。1911年トリエステで行ったイタリア語によるイギリス文学についての講演の中で、ジョイスはこのようにクルーソーについて語っている。

彼こそは、フライデー... が被征服民族の象徴であるように、イギリスの植民地開拓者の真の原型であります。アングロ・サクソン精神のすべてがクルーソーの中にあります。すなわち男性的独立心、無意識の残虐性、頑強さ、鈍いくせに能率的な知性、性的鈍感さ、実際的で均衡のとれた宗教心、打算的な寡黙などです。この単純で、感動的な作品をその後の歴史の光にあてて読み返してみると、なんびともその予言的な呪文に魅せられずにはいられません。<sup>13</sup>

アングロ・サクソン以外の人間の方が、『ロビンソン・クルーソー』が道徳的な帝国主義を代表する神話であることを敏感に見抜き、その帝国主義的意味合いに目をこらしやすいことは確かだ。これも倫理にかかわる反応ではある。しかし、読者が自分の中にフライデーだけではなく、ロビンソ

ンをも見出した時、歴史を超えた普遍的な人間のコンプレックスを意識したことになるだろう。

「経営者」ロビンソンは、個人主義と利潤追求が抱える倫理的問題を今後も提起し続けることは間違いない。

[本論は、2006年8月25日、青山学院大学での、テキスト研究会第六回大におけるシンポジウム、「現代批評と向き合う」の中で発表した内容に基づいている。]

### 【注】

本文中のページ数は、それぞれ次のテキストの版による。

Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*. John Richetti(ed.) London:Penguin Books, 2001.

J.M.Coetzee, *Foe*. 1986; London:Penguin Books, 1987.

- 1 J.Hillis Miller, *The Ethics of Reading* (New York: Columbia UP, 1987) は、文学を読むことの倫理的な効果について議論が活発化する端緒ではなかったかと思われる。彼は読むという行為には必然的に倫理にかかわる瞬間があり、それは文学における言語に反応する根源的な "I must" であるという。文学をよく読むという倫理的要請に答えるためには、言語分析、修辞の研究が必須であり、それを、文学の歴史性、社会性、イデオロギーの研究に組み入れていくことが今日の人文学で求められていると主張している。ニヒリズムであるとか、不道徳であるとか非難される脱構築が十分な読解そのものであることを弁明するという意図もあったように思える。
- 2 日本では、たとえば、大塚久雄 『国民経済』(1965; 講談社、1994) 講談社学術文庫、及び 『社会科学の方法—ヴェーバーとマルクス—』(岩波書店、1966) 岩波新書、及び 『社会科学における人間』(岩波書店、1977) 岩波新書 他。
- 3 夏目漱石は『文学評論』で、『タトラ』や『スペクテイター』等の先駆者としてこの定期雑誌に言及しているが、わずか400部位しか印刷されていないので、現存する保存状態のよいオリジナルは少ないらしい。Pickering & Chatto

Publishers が *Defoe's Review 1704-13* として、全 9 巻で 2003 年から 2011 年にかけて復刊を始めている。

- 4 ダニエル・デフォー著 『イギリス経済の構図』 山下幸夫・天川潤次郎訳（東京大学出版会、1975）
- 5 この論文は、大阪市立大学での英語の授業で『ロビンソン・クルーソー』を読んでいた経済学部の学生から教えてもらったものである。
- 6 奥村宏 『法人資本主義 — 「会社本位」の体系 —』（朝日新聞社、1991）朝日文庫、p 3 5。
- 7 富山太佳夫は、この引用箇所、名誉革命の翌年に制定された『権利の請願』に見られる、上からの保護と下からの忠誠の関係を前景化させることによって、そこにある搾取の関係を覆い隠してしまう構造を読み取っている。「黒い思想家—『権利の請願』とポストコロニアリズム』『岩波講座 文学 別巻 文学理論』（岩波書店、2004）、p 2 8 3。
- 8 M. グリーン 『ロビンソン・クルーソー物語』 岩尾龍太郎訳（みすず書房、1993） p 3 4、p 2 8 6。
- 9 岩尾龍太郎 『ロビンソン・クルーソー変形譚史』（みすず書房、2000）
- 10 田尻芳樹編 『J. M. クッツェの世界—<フィクション>と<共同体>』（英宝社、2006）第三章「沈黙が語るもの—『フォー』とその批評史をめぐる」（小泉有加）
- 11 J.M.Coetzee, *Stranger Shores: Essays 1986-1999* (London: Vintage, 2002), p24.
- 12 M. グリーン 前掲書、pp 2 8 6—7。
- 13 ジェイムズ・ジョイス「ダニエル・デフォー」 飯島淳秀 訳 『英米文学』立教大学文学部英米文学教室 1966 年、No. 2 7。